

四谷の

千枚田だより



第 126 号

想いをふりかえって

千枚田の資料を調べていたら平成十一年、「町民の主張」の原稿がみつかった。案外まとまったことを主張したもんだと思ひ、その時の想いを紹介させていただく。

千枚田によせて

県道鳳来東栄線を廻り、連谷小学校を少し過ぎるころ、標高八百八十二メートルの美しい姿をした鞍掛山がみえてきます。その山の南西斜面、中腹二百三十メートル四百二十メートルの間に平行し、細長く、さながら城壁を思わせるような大きな岩や石を繋ぐように石積みされた段々田んぼ。ここが鞍掛山麓千枚田です。

鞍掛山に降り注いだ雨は約一ヘクタールの太平の台地に深く吸収され、お不動様の祀られている岩間からコンコンと湧き出ております。この湧水は大変強く、水量も毎時七十トン前後と常に安定しており、水温も年間を通し十三℃と、ほとんど変化がありません。天の神様がくださったこの汚れを知らない恵まれた湧水はひとつひとつの田んぼに溜まり、ゆつくりと丁寧な水を横向きに潤していきます。また、棚田はひとつひとつが降った雨の調整池になるため、洪水、地滑りなどを未然に防ぎ、汚れた空気、炭酸ガスを吸収するなど、治水、環境面でも大きな力となっております。

この大きな役割を担う鞍掛山麓

あるほどです。

昭和三十年代には化学工業の急激な発達、四十年代以降には高度経済成長期に突入、新幹線開通、万博等々、神武景気、いざなぎ景気に沸き立ち、当然その波は田舎のこの地域にも押し寄せ、安定した現金収入を求め我も我もと近隣の会社や工場に働きにでかけ、母ちゃん、爺ちゃん、婆ちゃんの三ちゃん農家となつてしまいました。それが今では母ちゃんまで働きにでかけてしまつて、爺ちゃん、婆ちゃんが主役の農家になつてしまいました。

我が国が世界でもまれな発展を遂げたのも、田舎の労働力が礎となつていふことはゆがめない事実だと思ひます。したがって労働力の不足と、それに追い打ちをかけるように政府の米あまり対策の一環として転作、休耕施策が行われ減少の一途をたどつてしまいました。

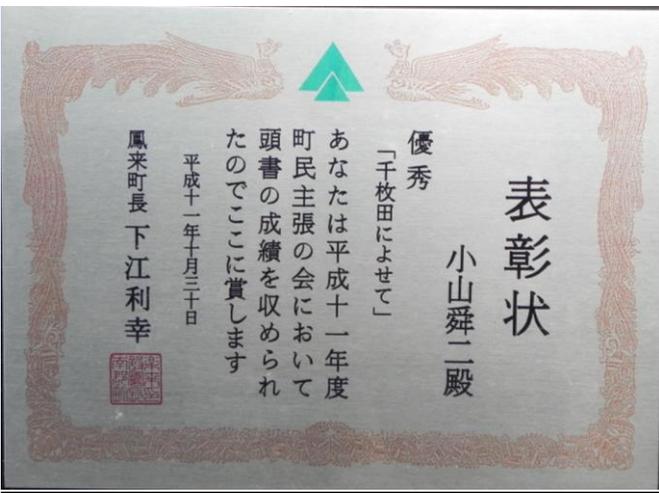
減反施策のとられる昭和四十六年までは、おおよそ八百五十戸、千二百九十六枚の田んぼが作られておりましたが、現在では三百六十戸四百二十枚までに減少してしまいました。農家は二十五戸、平均耕作面積は十二ア、十五枚、一枚あたりのおよそ平均〇.九アと非常に小さいものです。

急な畦道しかなく、小型耕耘機も田植機も梯子をかけやつと渡る始末で、機械を出し入れするくらいな

の千枚田で穫れたお米は美味しく、昔は酒米として重宝されたことも

ら手で植えたほうがよつほど早い。そんな手間と労力のかかる棚田での米作りを耕作者の多くは何度投げだそうとしたか知りませぬ。耕作者はそんな時、この棚田を開いた先祖、先人の苦勞が、また、明治三十七年には長雨から山津波となり家屋十戸と田畑が流出し、十一人の尊い犠牲者が出るといふ大惨事がありました。こんな時も先人はめげず、鍬とモッコで復興に立ち上がり何年も何年もかかつて荒れた地を田んぼに変えてきたのです。棚田の耕作者はそんなことが偲ばれ、「ここに棚田があるから作る」という使命感、義務感という心境から守られているものと思ひます。

私はこの土地に生まれ育ち、田ん



表彰状

小山舜二殿

優秀

「千枚田によせて」

あなたは平成十一年度町民主張の会において頭書の成績を認められたのでここに賞します

平成十一年十月三十日

風来町長 下江利幸

ぼも作り、段々田たんぼの米つくりの厳しさも苦勞も知つて立場から平成三年、千枚田の荒廢を何とかくい止めた一心で、大勢の方たちを知つてもらうには視聽覚が一番訴えやすいと思ひ、写真を通してPRに努めようと心に決め、平成六年秋「わかしやち国体山岳競技」がこの地で開催された折、一回目の写真展を山びこの丘伝承館ギャラリーで行いましたところ、国体参加者の皆さん、地元の方皆さん、大勢にご高覧いただくことができました。そして「千枚田、とても美しく風情がありますね。残してほしい日本の風景です。」とか「鞍掛山と千枚田の写真に感激しました。絶対残してください。」また「千枚田は素晴らしい。我がふるさとと素晴らしい感じが分りました。」等々励ましの感想文をたくさんいただきました。また、ふるさとキャラバンの平塚順子チーフプロデューサーがこの地方で公演したい意向で訪れ、日本の農村の原風景である全国の棚田を守るため、現在、農水省に掛け合つているが何度掛け合つてもらわぬがありがたい。今、全国の棚田の写真コンクール(棚田フォトコンテスト)を計画し、省庁に呼びかけている。等々、お互いに保存にかけての意欲と大変さを話し合いました。

その後、ふるさとキャラバンが企画した棚田フォトコンテストに全国から沢山の応募があり、日本の農村の原風景「棚田」の作品の素晴らしさから文化庁や環境庁、国土庁が感動し、農水省も重い腰をやつと上げ、棚田保全に対し急速に進展する

ことになりました。そして、平成七年には第一回全国棚田サミットが高知県の四万十川上流の構原で開催され、今年、第五回目が三重県の丸山千枚田で盛況に開催されました。

その後、連谷コミュニティも我々の地域の財産を後世まで残そうと立ち上がり、コミュニティ活動として私の撮った千枚田の写真を連谷会館に展示、現在でも多くの人々に美しさ素晴らしさと呼びかけております。

また、新美術協会に所属して千枚田をライフワークとした私の作品を東京都、大阪府、愛知県立の各美術館にも出展し、多くの皆さんに紹介しております。

一方、連谷小学校では玄関にも写真が展示されており、野外活動の一環として耕作者の協力で稲作体験を行っております。

平成八年、田植が間近になったある日、私の知人(河西 忍)とそのグループが「姿を消しつつある千枚田の保存を兼ねた米作りをしたい」と相談がありました。地主の協力で六年間休耕し、荒廃した田んぼ十枚を見事に復旧し、現在では四十枚近くの新田んぼをつくり、千枚田一番の太百性として活躍されております。そして、みよりの秋には連谷小学校の子供を呼び、餅つきなどをして収穫祭を行うなど、地元にも一生懸命でとけ込んでいてくれます。知人とそのグループは私の書いた千枚田の概要を英文にして地球温暖化京都大会で、全世界の皆さんにアピールするなどの活動もしております。

二回目の千枚田写真展は平成八

年、前回と同じ山びこの丘伝承館ギヤラリーで第一回全国棚田サミットの資料展示と共にを行いましたところ、地元の皆さんを始め佐宗県議町長さん、早稲田大学名誉教授の中島先生など、大勢にご高覧いただくことができました。

平成八年十月、町議会で町長さんが「千枚田を守る財政措置を考えた」と答弁されました。また、平成九年六月には地元県会議員の佐宗先生が県会の一般質問で棚田保存を呼びかけていただきました。そして、早稲田大学の中島先生は東京で連続講座「棚田」で四谷の棚田を紹介していただきました。

地元耕作者も町役場指導による千枚田保存に意欲を示し、平成九年一月十二日に「鞍掛山麓千枚田保存会」という名称で発足いたしました。翌十年には千枚田の現状を把握するため、平面測量を実施しました。

今年、十一年度には軽トラックが通れる農道を兼ねた景観道の造成を名目に国の「ふるさと水と土ふれあい事業」の助成に着手していただきました。そして、この七月には農林水産大臣から日本の棚田百選に認定されました。

ただ、見るには素晴らしい風景ですが、つくることが大変、守ることも大変な急傾斜の千枚田、先人の汗と苦勞の結晶、歴史的文化遗产を後世に引継ぎ、伝えるためには耕作者の思いと努力には限界があります。

この、歴史的文化遗产を町のひいては国の貴重な財産として未来に受け継いでいただくためには皆さんや行政の暖かい協力なしでは決できません。その手だての一つと

して行政の助成を受け、景観道が完成した暁には千枚田の未来永劫と、我が町鳳来町の活性化のためにもぜひ、全国棚田サミットを招致できればと願っております。どうか町民の皆さん、鞍掛山千枚田の保存に暖かい目で見守って下さい。(原文)

視察研修

二月一日、幸田町鷺田東部環境を守る会三十五名(野沢其代表)は今後の活動の参考と会員の見識を深めるため①棚田の景観保全について②はざ架け等の伝統農法の保全について③地域住民(非農家)との交流について④小水力発電について等の研修内容をもって幸田町役場環境経済課職員の引率で訪れた。礼状 前略、視察研修の節には懇切



なる説明、教示を賜り篤くお礼申し上げます。お陰をもちまして、初期の目的を十分に果たすことができ、大変有意義な研修であったと参加者一同心より感謝いたしております。ご説明いただきました内容につきましては、今後の当環境を守る会の農地の維持及び保全に大いに役立てて参る所存でありますので、今後ともよろしくご指導くださいますようお願い申し上げます。後略

成果報告会

二月十六日、愛知県図書館を会場に「あいち森と緑づくり環境活動・学習推進事業交付金に係わる成果報告会」が開催され(舜)が出席する。保存会もこの事業の採択を受け、五年間、連谷お助け隊の絶大なる協力と地域住民の出役で校区全域の住環境整備を実施した。

五年間の主な事業展開と成果

方瀬集落と小学校。稲目、与良木線(市道)は灌木が繁り昼尚暗く治安面においても悪く、住民の心配要素であった箇所や連谷地区全体の住環境整備(除伐)を実施。この事業に理解した住民の多くが積極的に参加し、地域住民の絆が一層深まったことや明るい村づくりが達成できたことは地域の宝とした「四谷の千枚田」と「あいち森と緑づくり事業」のお陰と感謝の念に堪えない。

平成二十六年二月十五日

鞍掛山麓千枚田保存会

文責 小山舜二